

9/8(木)

【分科会 4】看護とリカバリー

～「リカバリーを促進する看護師の態度に関する研究」報告から～

話題提供者：来栖清美（森ノ宮医療大学保健医療学部看護学科）

渡辺純一（財団法人井之頭病院臨床研究室）

司会：仲野栄（社団法人日本精神科看護技術協会）

今年度の看護の分科会は、「看護とリカバリー」のテーマに「リカバリーを促進する看護師の態度に関する研究報告から」というサブタイトルをつけた。

昨年度の分科会で「精神科病院の中で、看護師はリカバリーを実現することはできるのか？」についてフロアと意見交換を行った際に、「患者さんのリカバリーに看護師のどのような態度が影響を及ぼすのか調査をした結果、看護師は“忙しいから話しかけるなオーラ”を全身から出しているという声がありました」という発言があった。その瞬間、発言者に会場中の注目が集まり、多くの参加者が肯定と否定の両方を含んだため息をついたという場面があった。そこで、次年度の分科会でその調査報告をしていただく企画が生まれた。

今回報告していただいた調査は、「精神障害のある当事者の前向きな気持ちに影響を及ぼす看護師の態度」について、当事者の方々へのインタビューを分析して明らかにしたものであった。調査を実施するにあたり、前向きな気持ちを「当事者が『元気がでる』『積極的になれる』『夢や希望がもてる』といったその人なりの生き甲斐や生活を取り戻すために必要な心もち」と定義している。私たち看護師は、患者さんや利用者さんがこのような気持ちになれるように、日々の業務の中でかかわっているはずである。しかし、報告された結果には【対等なスタンス】【信頼】【誠実さ】【和み】【心情への寄り添い】【自信へのつなぎ】【意欲の引き出し】といった前向きな気持ちになる看護師の態度がある一方、【希薄な関心】【蔑視】【寄せ付けない】【憂さ晴らし】【怠惰さ】【棚上げ】といった前向きな気持ちになるのを妨げる看護師の態度についても、具体的な場面や発言が紹介された。

[患者とかかわるよりも業務をこなすことを優先する][忙しさを醸し出す][患者がどのように思うかを気にしない][看護技術の未熟さを棚に上げる][患者の言うことを信じない]。このような報告を聞いて、フロアからは「私が勤務する病棟にも、こういった“古いやり方”をする看護師がいるが、その人を変えるのは難しい」という意見が多く出された。一方、熟練した看護師の経験知はすばらしいので活用すべきという意見もあった。また、個人の問題の他に、病棟や病院の風土や文化の影響も大きいという意見もあった。

たくさんの看護師が、自分の職場を思い浮かべながら色々な思いを語った。そして、看護師は「専門性」という要素（スキル）と「人間性」という要素（センス）の両方が求められるものであり、それを自覚することが精神科病院でのリカバリーの実現の第一歩となるということを認識することができた。

《仲野栄（社団法人日本精神科看護技術協会）》